

幼稚園教育におけるチーム保育の多様な形態に見る望ましい運営方法

A Study on Desirable Managements of Various Team Childcare Styles in Preschool Education

馬場訓子*・守屋 操**・井山房子*・古埜弘子*・

Noriko BABA・Misao MORIYA・Fusako IYAMA・Hiroko KOYANO・

白神繁子**・平松由美子*・高橋 慧**・高橋敏之***

Shigeko SHIRAGA・Yumiko HIRAMATSU・Kei TAKAHASHI・Toshiyuki TAKAHASHI

Abstract

This paper discusses the possible issues and desirable management for various styles of team-childcare practicing in preschools, based on group discussions by co-researchers who has enough experiences of childcare. It is concluded that three factors are necessary for desirable team-childcare management in any style; (1)Well human relations, (2)Sharing intelligence/information/awareness, and (3)Specific roles in team.

キーワード：幼稚園教育、チーム保育、多様な形態、運営方法、グループディスカッション

I テーム保育の多様な形態における陥りやすい問題点及び望ましい運営方法

幼児にとっての園生活は、ただ単に一人一人の個性を尊重され、主体的に活動できていればそれでいいというわけではない。幼稚園教育が集団でなされる以上、集団の中の自分を意識し自分を位置付け、その集団生活において必要な社会性を身に付ける場でもある。したがって、様々な特性を持つ教師や他の幼児との関わりは、集団生活の中でしか得られない貴重な経験や人間関係を学ぶ場となる。幼児一人一人に対する細やかな援助を重視し、個性を尊重しながら集団を育てるという観点でも、チーム保育が有効に導入され円滑に運営できれば、幼児の望ましい園生活が実現できる。チーム保育に関する先行研究については、松村(2001)や岸(2011)等、チーム内の役割分担に関する研究成果が挙げられる⁽¹⁾⁽²⁾。また、職員間の協働意識について言及する入江(2003)の論考⁽³⁾等、実践研究に即した報告も散見される。一方で、先行研究は少なく、学術的な成果の蓄積は、不十分である。

これまで筆者らは、チーム保育の形態に着目し、現場の教師らが、【1】「全園児を全職員で保育している」という強い意識を持っていること、【2】実際の保育実践だけでなく保育時間外の保育に必要な話し合いの時間や園内研修などもチーム保育の一環として捉えていること、【3】チームの構成員は免許状の有無に関わらず、園内の全職員に対しチームの一員として認識していること、を質問紙調査から明らかにした⁽⁴⁾。その研究成果を前提に、現在、幼稚園で実践される様々なチーム保育の形態について、3つの観点から10形態に分類し、それぞれの特性や教育効果について検討した。研究の次段階として、本論では前述の10形態に焦点を当て、陥りやすい問題点及び望ましい運営方法について、保育経験者によるグループディスカッションを基に検討することを目的とする。経験から語られる内容からは、チーム保育の運営に関する多くの有効な示唆を得ることができると考える。

* くらしき作陽大学子ども教育学部子ども教育学科 Faculty of Childhood Education, Kurashiki Sakuyo, University

** 作陽音楽短期大学音楽学科幼児教育専攻 Major of Childhood Education, Department of Music, Sakuyo Junior College of Music

*** 岡山大学大学院教育学研究科発達支援学系 Course of Development Support Research, Graduate School of Education, Okayama University

II 方法

1 研究協力者及び調査の方法・内容・期間

研究協力者には、A県内の保育者養成校に勤務する、幼稚園教諭としての豊富な保育経験を有する園長経験者5名(表1)を選出し、グループディスカッションを実施した。実施日時は、20XX年2月14日、グループディスカッションの所要時間は、125分であった。彼らを研究協力者として選出した理由は、長年の保育経験者であると同時に、同じ保育者養成校に勤務しており互いに面識があるため、活発な議論が期待できると考えたからである。

まず、研究協力者には事前に、馬場ら(2018)⁽⁵⁾が示した幼稚園で実践されている10形態のチーム保育(①一学級複数担任によるチーム保育、②サポーター配置によるチーム保育、③自ら選んだ遊びにおけるチーム保育、④同学年幼児に対する保育内容の実践におけるチーム保育、⑤異年齢保育におけるチーム保育、⑥行事や集会におけるチーム保育、⑦専門的な保育内容におけるチーム保育、⑧預かり保育におけるチーム保育、⑨幼児理解や指導計画等に関する話し合いにおけるチーム保育、⑩ケース会議や園内研修におけるチーム保育)について、「それぞれの形態において特徴的な陥りやすい問題点と望ましい運営方法について書き挙げてください」と記述による回答を求めた。そして、グループディスカッションにおいて、それらの記述内容を基礎資料とし、各内容について経験を基に議論するよう依頼した。議論の内容はICレコーダーに記録すると共に、逐語録と概要を作成して記録した。

2 倫理的配慮

研究協力者には、グループディスカッションを始める前に、研究の目的・方法・倫理的配慮について説明を行った。次に、議論の内容はICレコーダーにて記録する許可を得て、データの保存は厳重に行うこと、研究終了後はデータを速やかに破棄することを口頭にて説明した。

3 分析方法

事前に得た記述を基に実施されたグループディスカッションを取り上げ、10形態それぞれの陥りやすい問題点及び望ましい運営方法について質的に分析した。グループディスカッションの発言内容は、録音データから逐語録を作成し、各形態に関する特徴的な語り部分に着目しながら分析を行った。以下における罫線で囲んだ部分は、逐語録からの抜粋であり、本文中の①②③等の番号は、特徴的な語り例の番号と対応する。

表1 研究協力者の属性

順	過去の職種	経歴(過去の勤務園等)	保育経験年数(年)
a	幼稚園教諭	・公立幼稚園 ・市教育委員会	38
b	幼稚園教諭	・公立幼稚園	38
c	幼稚園教諭	・公立幼稚園 ・特別支援のための幼児指導教室	40
d	幼稚園教諭	・公立幼稚園 ・特別支援のための幼児指導教室 ・市教育委員会	38
e	幼稚園教諭	・公立幼稚園 ・市教育委員会 ・県教育庁指導課	38

III 各形態における望ましい運営方法

1 一学級複数担任によるチーム保育

幼稚園教育は、学級制が基となり運営されるため、担任としてチームを組む教師と学級の幼児は、1年間を共に過ごすパートナーとなる。したがって、毎日を身近で過ごす教師間の人間関係は、幼児

の人格形成や育ちにも関与し、学級の雰囲気にも大きな影響を与える。それゆえに、何よりも教師間の良好な人間関係が求められるであろう。このことは、「幼児にとって、「教師が1人の方がよかった」にならないように、「複数でよかった」になるような関係が大切で、教育効果が得られるのが大事である」(表2-①)「お互いの考えを尊重し合えるような関係性が幼児の安心感につながる。それぞれの先生のおよさが、幼児に伝わるのが大事である」(表2-②)という語りからも推察できる。

この形態における第1の課題は、教師の組み合わせによる年齢や保育経験の差、それぞれの特性から生じる問題である。小田(2002)が、「小学校と同様に複数担任間の力関係や保育経験の差などで、一方が主導権をとり、他方は、その手伝いといった職階制に似たことが問題とされたことも少なくなかった」⁽⁶⁾と報告していることから、この点には十分な配慮が求められる。双方が信頼し合い安心して指導ができ、何でも話し合える関係を構築することが理想であるが、研究協力者が語るように、「ぶつかり合うとか譲らないとか担任同士の性格的なものもある。反対に、2人いるからと責任感がもてない場合もある」(表2-③)という事態も起こり得る。教育を担う専門職としての意識を高く持ち、不十分な点を補完し合ったり連携を深めたりしながら信頼関係を構築することが不可欠となるであろう。深い信頼関係を築くことができれば、教師として高め合える関係になることが期待できる。研究協力者は、「複数担任の場合は、同じ保育観を持って、幼児が困っている時にどのように手を差し伸べるか、どのような関わりをするのかを共通理解しながら、同じ気持ちでいつでも関われる姿勢が求められる。それには信頼関係が重要である」(表2-④)と強く指摘した。1日の生活の中で、特に親密度が高い関係であるため、教師同士の組み合わせについては、熟慮して決定する必要がある。一方で、信頼関係が構築できない場合、指導に協力が得られにくい事態も生じ得ると考えられ、その際の具体的な方策について検討することが大きな課題となるであろう。

第2の課題は、担任の間に子ども観や保育観や価値観等に大きな相違があると、幼児への日々の対応が異なることになり幼児が戸惑うことである。研究協力者は、自身の経験から「保育観が同じだと思っても、それぞれの担任の個性やセンスで、子どもへの関わり方や援助はやはり異なる。言葉、タイミング、雰囲気などの細かな違いが、戸惑いや不安、不信につながって、子どもの育ちに影響してしまう」(表2-⑤)と述べた。担任同士の保育観にずれがなく、同じ方向性で保育できることが、高い教育効果を得る条件になると考えられる。そのことは、「この先生なら大丈夫」と、子どもが甘えから自分の都合にいいように先生を選ぶのは、子どもにとってはマイナスになる時がある」(表2-⑥)と研究協力者が懸念する問題とも関連する。教師によって関わりや対応が違うことは望ましいと言えず、教師が複数存在することが、幼児の甘えの気持ちを助長したり主体性を阻害したりすることもある。常に幼児が安心感を持てるよう同じ保育観を持って保育に臨むことが、一貫した関わりにつながる。そのためには、目指す幼児像や学級目標や指導の方向性等を明確にし、それについて話し合う機会を定期的に設け、共通理解の下で日々の保育に臨むことが求められる。また、指導計画に基づいた保育内容や環境構成や援助について、十分な共通理解を図ることが前提となるであろう。

その工夫の1つとして、研究協力者は、担任同士が同じ場にいることが多いことから、「登園前の環境整備や保育中、また保育後の作業時等、担任教師が時間や場を共有できる時間を有効に活用し、遊びや幼児についての情報を共有できるよう積極的に関わるよう努めること」(表2-⑦)を提案した。一方で、指導計画の共通理解についても「主な役割分担はあるものの、指導の際の環境構成や再構成など、共通の役割を設定していると共通の場で話し合いができる」(表2-⑧)と語り、多くの業務の中で明確に分担する役割と、共通して担当する役割とを柔軟に設定することで、指導計画の共通理解に必要な時間を確保する方策を提案した。

表2 一学級複数担任によるチーム保育における特徴的な語り例

- | |
|--|
| ①幼児にとって、「教師が1人の方がよかった」にならないように、「複数でよかった」になるような関係が大切で、教育効果が得られるのが大事である。 |
| ②お互いの考えを尊重し合えるような関係性が幼児の安心感につながる。それぞれの先生のおよさが、幼児に伝わるのが大事である。 |

- ③ぶつかり合うとか譲らないとか担任同士の性格的なものもある。反対に、2人いるからと責任感がもてない場合もある。
- ④複数担任の場合は、同じ保育観を持って、幼児が困っている時にどのように手を差し伸べるか、どのような関わりをするのかを共通理解しながら、同じ気持ちでいつでも関われる姿勢が求められる。それには信頼関係が重要である。
- ⑤保育観が同じだと思っても、それぞれの担任の個性やセンスで、子どもへの関わり方や援助はやはり異なる。言葉、タイミング、雰囲気などの細かな違いが、戸惑いや不安、不信につながって、子どもの育ちに影響してしまう。
- ⑥「この先生なら大丈夫」と、子どもが甘えから自分の都合にいいように先生を選ぶのは、子どもにとってはマイナスになる時がある。
- ⑦登園前の環境整備や保育中、また保育後の作業時等、担任教師が時間や場を共有できる時間を有効に活用し、遊びや幼児についての情報を共有できるよう積極的に関わるよう努めることが大切だと思う。
- ⑧主な役割分担はあるものの、指導の際の環境構成や再構成など、共通の役割を設定していると共通の場で話し合いができる。若い人だけが毎日環境構成するとか役割を分けて決めてしまうと、そんな時間はできない。

(1) 担任教師の関係が同等のチーム保育

担任同士の関係が同等であることは、互いが遠慮することなく、対等な関係を維持できると同時に、学級や保育に対する意識の持ち方に対してもプラスに働く要因になると推察される。しかし、研究協力者によれば、同等だからこそ、「互いに自分の思いを優先させ、相手を受け入れにくくなる」(表3-①) こともあるようである。パートナーとして相手を敬う気持ちは、非常に重要であると言える。

互いが同等の関係であれば、活動によって主と補助の役割分担を交替しながら保育することが多いであろう。役割分担も互いのよさを活かし、柔軟に適材適所で交替することができる。研究協力者が「先生が2人いて、子どもがどっちの話聞いたらいいか、戸惑うことになる」と意味がない。担任同士が役割分担を交代するなど、保育の役割を決めていても、幼児には理解できないため、混乱を招く場合がある。主の時は主の役割を、補助の時は補助の役割を十分理解して意識して当たることが重要である」(表3-②)と指摘するように、幼児が混乱することがないように、主と補助の役割を明確にし、自分の果たすべき役割を十分に理解した上で意識して保育に当たる必要がある。基本的な役割分担はしていても、臨機応変に柔軟な対応も想定しておくことが重要である。このことは、保護者対応についても同様である。「保護者にとっては、保育や子どものことをどちらの担任に相談すればよいか戸惑うことがある。保護者が戸惑ったり気遣いをしたりしないように、年度当初に理解を得ておく必要がある」(表3-③)と考えられよう。そのためには、どちらの担任が相談を受けてもいつでも対応できるよう、幼児一人一人に対する共通理解は十分に図っておくことが前提になるであろう。

表3 担任教師の関係が同等のチーム保育における特徴的な語り例

- ①互いに自分の思いを優先させ、相手を受け入れにくくなる。
- ②先生が2人いて、子どもがどっちの話聞いたらいいか、戸惑うことになる」と意味がない。担任同士が役割分担を交代するなど、保育の役割を決めていても、幼児には理解できないため、混乱を招く場合がある。主の時は主の役割を、補助の時は補助の役割を十分理解して意識して当たることが重要である。
- ③保護者にとっては、保育や子どものことをどちらの担任に相談すればよいか戸惑うことがある。保護者が戸惑ったり気遣いをしたりしないように、年度当初に理解を得ておく必要がある。

(2) 主担任・副担任として役割が異なるチーム保育

主担任と副担任として、明確に異なる役割でチームを組む場合、役割分担や関係性については、固定しがちになる実態を指摘できる。協働関係に対しても、同様のことが当てはまり、副の立場としての意識が高まり過ぎると、保育に対して主体的に関わる機会が少なくなり消極的になる恐れがある。また、副は主の補助に徹してしまったり、いつも集団とは異なる動きをする幼児への個別対応が役割になってしまったりすることも推察される。自分の役割の視点からしか、幼児や保育を捉えることができないという事態を避けるよう、考慮されなければならない。自らの役割を全うしながら、十分な

共通理解を図り、同じねらいに向かって保育を進めていくことができれば、協働関係の下で保育を行うことが可能である。「副担任であっても学級を担任しているという意識を持ち、主であっても副に指摘された助言や間違いを受け入れながら保育を進めることが大切である」(表4-①)と示されるように、どちらの立場で配置されたとしても、1人の担任としての意識を強く持つことが重要であると言える。

一方で、保育における役割分担については、研究協力者が、「主担任は学級全体の保育指導、副担任は保育補助や環境整備が一般的な役割となっているため、自分の担当以外の役割については手出しをしないように気を遣って消極的になったり、全く関わらないようにしたりすることもある。指導を常に主と補助という関係ではなく、副担任も主としての役割を担当するように計画する」(表4-②)と提案されるように、常に主と補助の役割を固定するのではなく、柔軟に交替しながら保育することが望ましい。

表4 主担任・副担任として役割が異なるチーム保育における特徴的な語り例

<p>①副担任であっても学級を担任しているという意識を持ち、主であっても副に指摘された助言や間違いを受け入れながら保育を進めることが大切である。</p> <p>②主担任は学級全体の保育指導、副担任は保育補助や環境整備が一般的な役割となっているため、自分の担当以外の役割については手出しをしないように気を遣って消極的になったり、全く関わらないようにしたりすることもある。指導を常に主と補助という関係ではなく、副担任も主としての役割を担当するように計画する。</p>

2 サポーター配置によるチーム保育

園には、様々な立場のサポーターやフリーと呼ばれる職員、特別支援員などが配置されており、保育補助を担う職員が存在する点において効果的である。しかし、「教師間の役割の固定化が見られ、保育後の話し合いなどに十分な時間が取れない場合は、まさに保育中の援助の手という意味での複数である」⁽⁷⁾という指摘が認められるように、教師間の協働関係において互いの役割は固定化しているため、補助としての意識の持ち方が重要であると言えるだろう。彼らには、「学級目標や学級経営方針や担任の意図を理解しながら役割を踏まえた上で教育効果を高めていく」(表5-①)意識が必要となる。どのようにすれば担任教師と共通した保育観を持って補助的な役割が果たせるかが、今後の課題であると言える。

(1) 保育補助としてチームに加わる場合

まず、この形態において懸念されることは、不要な関わりによって幼児に必要な経験を奪ってしまう可能性がある点である。このことは、「教師が複数いることで子どもを甘えさせてしまう状況にならないように、子どもが自立できるよう、教師の援助がかえってマイナスにならないようにしないとイケない」(表5-②)、「全ての面に手を出してしまって、お手伝い母さんになってしまう」(表5-③)という指摘に表れている。研究協力者は、彼らの幼児への関わりに対して、「必要なければ手を出さないのもサポートである」(表5-④)と指摘した。また、「必要だから来てもらっていて、時期的にも必要なくなったら外れていく。「あなたはどのサポーターをしてほしいから来てもらっているんだ」ということをはっきりしておかないとイケない」(表5-③)、「何をサポートしてほしいのかをはっきり伝えることが大事である」(表5-④)と言及されるように、配置目的を明確に伝え、必要な補助や援助、支援ができるような体制作りが必要である。常に補助をするのではなく、必要に応じて援助することを心掛け、幼児の自立を妨げないように、見守ることも大切にしながら、時期を見て配置を外すことを考える必要もあるだろう。そして研究協力者は、担任教師に対して、「つまずいている幼児をフリーの教師に任せてしまい、学級から切り離れた意識で担任が関わることがないように注意が求められる」(表5-⑤)と注意を促し、担任が彼らに依存してしまう現状を示唆した。そのような事態を回避するためには、「上手くいっていない部分の対応を任せ、担任はそのことを理解した上で保育を進めなければならない」(表5-⑤)と、担任が十分な認識を持って保育に臨むことが求められると言える。

次に、サポーターは、担任が必要と思う場面では臨機応変に補助に入ることが多い。園によっては園長や担任を持たない教師が必要に応じて補助に入ることもあるが、それ以外の彼らのほとんどは、保育時間のみの勤務の場合が多い。保育の計画・準備等に参加することは少なく、幼児や保育に必要な共通理解についても、情報を十分に共有できていないことも考えられる。保育を行う上で、担任と同じ方向性で幼児に関わるためには、学級目標や活動のねらい、その学級や幼児の実態を日頃から把握しておくことが必要となるであろう。担任教師との保育に必要な共通理解を図るための時間の確保が難しい現状の中で、それらを円滑に行うための工夫が課題となる。活動内容や活動の流れ、保育のねらい等の共通理解について、研究協力者は、「時間的にもフルタイムでいるわけではないから、担任と十分に情報を交換し合う時間がない。保育に必要な情報交換を口頭でするのか、連絡ノートでするのか、手立てをはっきりしておく必要がある」(表5-⑥)と、その方法を明確にしておく必要性を述べた。「担任とサポーターは、保育中、互いに声掛けをして共通理解を図りながら保育を進めていくことを常に心掛けることが大切である」(表5-⑦)といった保育中の情報交換も求められるであろう。また、「いつも必要な時にカバーしてもらえるかと言ったらそうではない。だから必要な時には、「この時には来てほしい」と伝えておくことが重要である」(表5-⑧)と指摘されるように、事前に計画性をもって支援要請をしておくことも重要である。

補助を担う職員は、担任教師が必要と感じる場面で、必要に応じて対応できる高い能力や判断力を有する者であることが望ましい。保育の展開は、予想しないことも起こり得るため、事前に決められている特定の役割を担うだけでなく、必要に応じて適宜補助に入る場合も想定される。研究協力者は、「指導計画に基づいた動きができることが大事だけど、計画はあくまで計画であって、その時に幼児の様子をよく見て、それに応じた関わりができないといけない」(表5-⑨)、「個々の課題をしっかりと把握して必要な時だけの援助が必要である。臨機応変に、必要だと思えばすぐ補助や援助ができる力もいるし、他の人との連携も必要なので、補助の先生は大変な力が必要だと思う」(表5-⑩)と彼らの力量の重要性について指摘した。

表5 サポーター配置(保育補助)によるチーム保育における特徴的な語り例

- | |
|--|
| <p>①学級目標や学級経営方針や担任の意図を理解しながら役割を踏まえた上で教育効果を高めていく。</p> <p>②教師が複数いることで子どもを甘えさせてしまう状況にならないように、子どもが自立できるよう、教師の援助がかえってマイナスにならないようにしないといけない。</p> <p>③全ての面に手を出してしまっ、お手伝い母さんになってしまう。必要だから来てもらっていて、時期的にも必要なくなったら外れていく。「あなたは何のサポーターをしてほしいから来てもらっているんだ」ということをはっきりしておかないといけない。</p> <p>④必要なれば手を出さないのもサポートである。何をサポートしてほしいのかをはっきり伝えることが大切である。</p> <p>⑤つまづいている幼児をフリーの教師に任せてしまい、学級から切り離れた意識で担任が関わることはないよう注意が求められる。上手くいっていない部分の対応を任せ、担任はそのことを理解した上で保育を進めなければならない。</p> <p>⑥時間的にもフルタイムでいるわけではないから、担任と十分に情報を交換し合う時間がない。保育に必要な情報交換を口頭でするのか、連絡ノートでするのか、手立てをはっきりしておく必要がある。</p> <p>⑦担任とサポーターは、保育中、互いに声掛けをして共通理解を図りながら保育を進めていくことを常に心掛けることが大切である。</p> <p>⑧いつも必要な時にカバーしてもらえるかと言ったらそうではない。だから必要な時には、「この時には来てほしい」と伝えておくことが重要である。</p> <p>⑨指導計画に基づいた動きができることが大事だけど、計画はあくまで計画であって、その時に幼児の様子をよく見て、それに応じた関わりができないといけない。「計画はこうだったけど、実際にはこうだったのでこのような指導をした」という考えが大事。本当に力が必要で、誰でもできるものではない。</p> <p>⑩個々の課題をしっかりと把握して必要な時だけの援助が必要である。臨機応変に、必要だと思えばすぐ補助や援助ができる力もいるし、他の人との連携も必要なので、補助の先生は大変な力が必要だと思う。</p> |
|--|

(2) 特別支援に関する加配としてチームに加わる場合

特別支援に関する加配の支援員との協働の難しさについて、研究協力者は、「自分としてはやらせたいと思う所を、支援員はよかれと思ってしてしまったなど、協働の関係にもっていくまでが大変である」(表6-①)ことを示唆した。要支援児に対する支援に関しては、不要な支援が自立を妨げないよう、一人一人に応じた必要な支援を行うことが求められる。担任教師と情報を共有しながら互いの役割や教育方針を理解した上で支援計画に基づいた支援が必要となるだろう。その際、注意すべきことは、個の支援として配置されていても、その幼児とだけの関わりや関係作りにとどまってはならないことである。研究協力者はその点について、「そこに存在している大人であれば、どの幼児も先生として見ている。特定の幼児のみとの関係だと他の幼児に悪い影響が出てしまう。関わってくる幼児に対しては、担任と同じような気持ちで関われる心構えが大切である」(表6-②)との見解を示した。また、支援員の中には教員免許状を有さない者もいるため、管理職の指導やサポートも求められる。研究協力者からは、「所管の市町村や諸団体が実施する研修会への参加を勧め、個に応じた支援について学びが深まるようにする」(表6-③)という提案もなされ、加配の支援員をチームの一員として支援する体制の確立も重要であろう。

表6 サポーター配置(特別支援加配)によるチーム保育における特徴的な語り例

①自分としてはやらせたいと思う所を、支援員はよかれと思ってしてしまったなど、協働の関係にもっていくまでが大変である。
②そこに存在している大人であれば、どの幼児も先生として見ている。特定の幼児のみとの関係だと他の幼児に悪い影響が出てしまう。関わってくる幼児に対しては、担任と同じような気持ちで関われる心構えが大切である。
③所管の市町村や諸団体が実施する研修会への参加を勧め、個に応じた支援について学びが深まるようにする。

3 自ら選んだ遊びにおけるチーム保育

研究協力者によれば、この形態における第1の課題は、「担任する幼児の姿を全て把握することは困難である。また、担任以外の幼児に対して、個に応じた関わりや声掛けができにくい」(表7-①)点である。なるべく担任をする幼児の様子や遊びについて把握できるよう、遊びの場を担当した教師は、その遊びに関わった幼児の情報を担任に伝えるなどの教師間の情報交換が必要不可欠となる。また、担任以外の幼児への関わりについては、日々の話し合い等における一人一人の幼児に対する理解が問われるであろう。

第2の課題は、日常的に行われる活動ならではの難しさや、教師の援助が見回りや放任になりがちな実態である。それは、「日常的に毎日繰り返される活動だからこそ、日々の反省、評価をしにくい」(表7-②)という言葉及に表れており、日常的にPDCAサイクルを行う必要性にも触れられている。このことに関連して、「遊びの場の計画や準備について、「去年もしたからこうだ」とか、いつも遊びの内容や環境構成を知っている人が準備していることになりかねない」(表7-③)と述べられるように、遊びの場の設定については、その時期の遊びを把握している経験豊富な教師のみがしてしまったり、逆に若手教師に任せてしまったりする場合もあり、全員の共通理解を図りにくい状況も指摘された。できるだけ全員で関わったり、輪番制にしたりなどの工夫も有効であると言え、「年々忙しさが増す現状で、「この時期にはこの遊びを出して、具体的にはこういう環境構成をして、援助はこうだよ」と簡単に紙面にでも書いて配っておくなどの工夫も必要である」(表7-④)と語られるように、全教職員がその時期の遊びを理解できるよう努める必要があるだろう。また、このような遊びの時間は、学級担任やサポーター、用務員等全教職員が幼児に関わる時間帯である。研究協力者は、「環境が望ましくない状態になった時、計画でねらうところがきちんと分かっている、そっと環境を変えてやれないと遊びが終わってしまうということもある。それぞれの時期の遊びについての援助や環境構成など、しっかり共通理解しておくことが大事である」(表7-⑤)と述べ、遊びについて指導計画を共有し、指導計画に基づいた環境構成や、方向性を統一した関わりができるようにする重要性を強調した。

表7 自ら選んだ遊びにおけるチーム保育における特徴的な語り例

<p>①担任する幼児の姿を全て把握することは困難である。また、担任以外の幼児に対して、個に応じた関わりや声掛けができにくい。</p> <p>②日常的に毎日繰り返される活動だからこそ、日々の反省、評価をしにくい。毎日毎日が小さなPDCAサイクルで進んでいく仕組みが必要である。</p> <p>③遊びの場の計画や準備について、「去年もしたからこうだ」とか、いつも遊びの内容や環境構成を知っている人が準備していることになりかねない。</p> <p>④年々忙しさが増す現状で、「この時期にはこの遊びを出して、具体的にはこういう環境構成をして、援助はこうだよね」と簡単に紙面にでも書いて配っておくなどの工夫も必要である。</p> <p>⑤環境が望ましくない状態になった時、計画でねらうところがきちんと分かっている、そっと環境を変えてやれないと遊びが終わってしまうということもある。それぞれの時期の遊びについての援助や環境構成など、しっかり共通理解しておくことが大事である。</p>

4 同学年幼児に対する保育内容の実践におけるチーム保育

同学年の幼児を対象にチーム保育を実践する際の陥りやすい問題の第1は、学級を解体して活動していても担任として受け持つ幼児に注意が向きやすいことが挙げられる。この形態の保育は、「学年でする発表会でも学級を解体して、音楽的なことを発表するグループ、運動的なことを発表するグループだとか、そういった時にも活用できる」(表8-①)と研究協力者によって語られるように、発表会のような行事や普段の設定保育などで導入される場合が多い。同学年の幼児と担任教師を1つのチームとして捉え、学年団として幼児を育てる意識を持って保育に臨むことが必要であろう。このことは、「学年としての保育内容やねらいを明確にし、その内容を同じレベルで実践につなげていくことが大切である」(表8-②)との言及からも読み取れる。また、研究協力者は、「同学年を担当する先生は、連携が取りやすい。ねらいに基づく活動計画を共有し、必要な援助の見通しも個に応じて明確にしておく。計画から反省まで話し合いで理解した上で活動を行うことが大切である」(表8-③)と述べた上で、計画から省察に至るまでの協働の重要性を示唆した。同学年を担当する教師は、互いに学級運営に関して意識し合っていることが予想され、親密度が高いことから、そのような連携は比較的取りやすいのではないかと考えられる。

第2に、幼児のグルーピングにおける幼児数の問題が浮上する。同学年に複数の学級があり、保育の同質化を図る目的で導入される場合は、同一の保育内容を体験できるように活動を一齐に行うことも、幼児を柔軟にグループに分けて保育することも可能である。しかし、「幼児の人数が増え過ぎると指導が徹底しにくくなるから、グループの幼児数は考慮しないとイケない」(表8-④)と指摘されるように、対象とする幼児数については検討の余地がある。多様なグルーピングによって、幼児が多く幼児や教師と関われる利点を活かしながら、有意義な活動となるようグループの幼児数について熟慮する必要がある。

第3として、幼児数と同様に、教師数が増えるほど連携が難しくなることが挙げられる。「情報は、学年主任が集約しておくことが必要である」(表8-⑤)と言われるように、学年主任がチームのリーダーとして、全体の状況を把握し統率することが不可欠である。その中で、「保育内容によってそれぞれの得意分野を活かせるように、保育の内容に対してどの教師が有効かを検討されるとよい」(表8-⑥)と述べられるように、個々の教師の経験や得意分野が教育効果に反映できれば有効である。学級を基盤として保育をしていると、他教師の保育を見る機会は少なく、そのような機会は貴重である。若手教師にとっては、得意な活動分野で活躍することができ、熟練教師から指導を得ることで保育力の向上も期待できるであろう。

表8 同学年幼児に対する保育内容の実践におけるチーム保育における特徴的な語り例

<p>①学年でする発表会でも学級を解体して、音楽的なことを発表するグループ、運動的なことを発表するグループだとか、そういった時にも活用できる。</p> <p>②学年としての保育内容やねらいを明確にし、その内容を同じレベルで実践につなげていくことが大切である。</p>

- ③同学年を担当する先生は、連携が取りやすい。ねらいに基づく活動計画を共有し、必要な援助の見通しも個に応じて明確にしておく。計画から反省まで話し合いで理解した上で活動を行うことが大切である。
- ④幼児の人数が増え過ぎると指導が徹底しにくくなるから、グループの幼児数は考慮しないとイケない。
- ⑤情報は、学年主任が集約しておくことが必要である。
- ⑥保育内容によってそれぞれの得意分野が活かせるように、保育の内容に対してどの教師が有効かを検討されるとよい。

5 異年齢保育におけるチーム保育

幼児同士の関わり合いは、発達や成長に影響を及ぼしやすい。異年齢で保育する場合、教師のチーム構成だけでなく、幼児のグルーピングも年齢を超えて柔軟にできる。その際浮上する課題として、まず、教師による年齢別の発達理解が挙げられる。このことは、研究協力者の「各年齢の発達を把握しておかなければ、年齢以上のことをさせてしまう。その逆もある。関わる教師全員に、各年齢の発達理解が欠かせない」(表9-①)という語りにも表れている。経験豊富で様々な年齢を担当したことのある教師であれば、それぞれの発達過程における幼児の姿は容易に想像できるであろう。しかし、初任や若手教師といった経験の少ない教師にとっては、担当学年の年齢を超えた発達理解は大きな課題の1つである。発達理解が、活動の立案や援助を考える際の基盤となることを考えれば、それを踏まえた上で、「発達や成長を促すための年齢別のねらいを明確にし、適切な保育内容と教師の援助が重要である」(表9-①)と言える。年齢毎の幼児の実態、各年齢の活動のねらいを明確に持ち、共通理解した上で、無理な活動にならないように、どの年齢の幼児の育ちもチームとして支えていく意識を持って指導に当たることが必要であろう。また、実際に保育に携わる異年齢の担任が、指導計画立案時から連携しておくことが重要である。その際には、研究協力者が示すように、「異年齢の幼児同士の関係性を把握して、ペアやグループの固定化や組み替え等、時期や期間や活動内容などをよく考える」(表9-②)視点を忘れてはならない。

次に、実践において注意すべき点として、異年齢の「幼児同士が関わることで安心し、個々の成長、発達を捉えにくくなることもある」(表9-③)点である。園によっては、交流活動のみが優先していることもある。研究協力者は異年齢保育の実態について、「年長児は、年少児のお世話をするということが目が行き過ぎて、年長児同士の遊びもあるのに自身の遊びの充実ができにくくなることもある」(表9-④)ことを示し、「年少児はお客様になってしまって退屈な体験になるかもしれない。年少児なりにも自分の力でやってみるのも大事である」(表9-④)と述べ、各年齢の主体性の育ちを促し、それを大切にできる適切なねらいと内容において実践されるべきであると主張した。同時に、交流の目的、交流する年齢を吟味しながら実践することが望ましい。また、研究協力者は、異年齢保育としてより教育効果を高めるための方法として、「年長児には活動の振り返りを通して、年少児への関わりを考えられるような機会を作る」(表9-⑤)ことを示した。「ただ手を貸すだけでなく、全部してあげるのでもなく、困っていたらどうしてあげたらいいのか、5歳なりに考えられるようにする。年少児はそれを見て育っていく訳だし、そこを考えられる5歳児を育てていくことが大事である」(表9-⑤)と、特に年長児に対する指導の重要性を指摘した。その点をどのように指導するのかという視野を持ちながら、チーム保育を実践することが求められる。

表9 異年齢保育におけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①各年齢の発達を把握しておかなければ、年齢以上のことをさせてしまう。その逆もある。関わる教師全員に、各年齢の発達理解が欠かせない。発達や成長を促すための年齢別のねらいを明確にし、適切な保育内容と教師の援助が重要である。
- ②異年齢の幼児同士の関係性を把握して、ペアやグループの固定化や組み替え等、時期や期間や活動内容などをよく考える。「大きい子が来て一緒にするのは恐いな」とか年少児が思うこともあるかもしれない。
- ③幼児同士が関わることで安心し、個々の成長、発達を捉えにくくなることもある。
- ④年長児は、年少児のお世話をするということが目が行き過ぎて、年長児同士の遊びもあるのに自身の遊びの充実ができにくくなることもある。反対に、年長児の関わり次第では、年少児はお客様になってしまって退屈な体験にな

るかもしれない。年少児なりに自分の力でやってみるのも大事である。

- ⑤年長児には活動の振り返りを通して、年少児への関わりを考えられるような機会を作る。ただ手を貸すだけでなく、全部してあげるのでもなく、困っていたらどうしてあげたらいいのか、5歳なりに考えられるようにする。年少児はそれを見て育っていく訳だし、そこを考えられる5歳児を育てていくことが大事である。年長児がどう動くのか、どう動けるのかの指導が大事である。

6 行事や集会におけるチーム保育

行事や集会におけるチーム保育について陥りやすい問題点として、計画や準備も含め、活動を担当する主の教師に任せ過ぎてしまうことが挙げられる。活動の進行を担当する主の教師と補助を担う教師の役割分担を明確にし、連携して当たることが求められる。互いの理解が不十分である場合、活動中に主から補助への指示が多くなり、活動が中断しやすくなることも懸念される。研究協力者もその点について「主に頼りがちになる。補助は、主の人以上に細やかな配慮をしないといけない。主の人だけが頑張ればよいものではない。補助をする人も目的をはっきり分かって適切な補助をしていかないと、チーム保育にならない」(表10-①)と指摘しており、補助の教師が個への対応をしたり活動の進行を盛り上げたり等の重要な役割を担わなければならないことを示した。円滑な運営のためには、活動の流れや環境の再構成についても、事前に全員で活動計画を共有し、それぞれの役割分担を明確にしておくことが重要であろう。一方で、研究協力者が語るように、「円滑に活動を展開することに意識が向き過ぎると、ねらいや内容がおろそかになったり、幼児の様子に目が向きにくくなって個への配慮が不十分になったりする」(表10-②)ことも考えられる。個のねらいに応じた援助の見通しの明確化も求められると言える。

また、研究協力者は、定期的に行われる行事や集会について、マンネリ化したり生活の連続性が保たれなくなったりする場面があることも示唆し、「行事や集会は、「行事ありき」でマンネリ化したり、幼児の生活の連続性が保たれなかつたりする場面がある。行事全体としてのねらいから逸脱しないよう、意図を再度共通理解し明確にすることで、幼児にとってよりよい経験になるようにする」(表10-③)と必要性を述べた。その上で、「本当に必要な活動を年間指導計画や幼児の姿から見極めることも必要だと思う」(表10-④)とし、指導計画に立ち返り、時期や内容を再度精査する姿勢を求めた。その中で、「毎月の誕生会のように、毎回出し物をする場合は、教師が様々なアイデアを積極的に出し合うと共に、それぞれの教師の得意分野が活かせるような場を設定し、保育意欲につなげるようにする」(表10-⑤)という提案は、幼児にとっても教師にとっても有意義なものになると考えられる。

さらに、園全体での行事などでは、「異年齢の幼児が集まる場合、そのことを意識した活動となるよう努め、年齢差の刺激をもらえるよう内容を考える」(表10-⑥)視点も忘れてはならない。異年齢が集まる機会であれば、なおさらに有意義なものとなるよう内容については熟考することが必要であろう。「当日の指導だけでなく、その前後の指導も重要である。計画段階から綿密な連携関係を構築していくことが求められる」(表10-⑦)と述べられるように、多くの教師が集まって行うことによって、保育内容の計画や準備や実践が幅のあるものになり、チーム保育のよさが活かされると言えるであろう。例年行われるような行事においても、連携するに当たり、計画や役割分担等の共通理解には時間を要す。その時間の確保が課題となるであろう。

表10 行事や集会におけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①主に頼りがちになる。補助は、主の人以上に細やかな配慮をしないといけない。主の人だけが頑張ればよいものではない。補助をする人も目的をはっきり分かって適切な補助をしていかないと、チーム保育にならない。
- ②円滑に活動を展開することに意識が向き過ぎると、ねらいや内容がおろそかになったり、幼児の様子に目が向きにくくなって個への配慮が不十分になったりする。
- ③行事や集会は、「行事ありき」でマンネリ化したり、幼児の生活の連続性が保たれなかつたりする場面がある。行事全体としてのねらいから逸脱しないよう、意図を再度共通理解し明確にすることで、幼児にとってよりよい経験

になるようにする。

- ④本当に必要な活動を年間指導計画や幼児の姿から見極めることも必要だと思う。幼児の興味や関心、通常の保育の流れを大切に、園内研修等で、時期や内容を十分吟味したり精選したりして全職員が目的や意義について共有する必要がある。
- ⑤毎月の誕生会のように、毎回出し物をする場合は、教師が様々なアイデアを積極的に出し合うと共に、それぞれの教師の得意分野が活かせるような場を設定し、保育意欲につなげるようにする。若手で保育に自信のない教師も、得意分野を認められる経験が意欲につながる。
- ⑥異年齢の幼児が集まる場合、そのことを意識した活動となるよう努め、年齢差の刺激をもらえるよう内容を考える。
- ⑦当日の指導だけでなく、その前後の指導も重要である。計画段階から綿密な連携関係を構築していくことが求められる。

7 専門的な保育内容におけるチーム保育

茶道や英会話や体操等の専門的な活動は、園の特徴的な活動として位置付けられていることも多く、園によっては活動することに目的が置かれている現状も認められる。しかし、幼児の貴重な体験として高い教育効果を期待するには、外部からの講師との連携が不可欠である。重要なのは、内容の精査を含め、講師と事前の打ち合わせや準備を綿密に行うことである。

講師との連絡や打ち合わせは、園長や主任等が行うことが多く、「講師のやりたいことと子どもの実態のすり合わせに、担任があまり入れない。園長などが全て把握して上手くいけばいいけど、担任の意図やクラスの実態と異なる場合があって、ぴったり上手いといったかと言われるとそうでない時もあったかもしれない」(表11-①)、「外部講師の思いが先行し、専門的な内容を幼児の実態に合わなくても伝授してしまうことがある」(表11-②)など、担任教師の意図と異なる内容や幼児の発達や実態、興味関心に沿った活動になりにくい場合があることが示唆された。「活動の目的を明確にし、講師と共有することが大事である」(表11-③)という指摘が示すように、担任教師は事前に、計画を立てる際の参考となるよう、幼児の発達や実態、活動のねらいや実践してもらいたい内容を講師に伝達することが求められる。また、「内容によって、幼児の反応も色々あり、苦手意識や不安感など幼児にとって逆効果になる危険性がある」(表11-④)ことから、活動を全園児で行うのか、学年もしくは学級単位で行うのかなどの幼児のグルーピングを含め、内容は十分精査される必要がある。「幼児の実態や入りにくい幼児がどこまでできそうかなど伝えて、活動内容を決定する」(表11-④)ことも考える必要があるだろう。

活動において、担任教師は、事前の環境構成やその活動に至るまでの指導を担当し、当日の講師による保育が円滑に進むよう補助を行う。「講師の意図が伝わらず、幼児が戸惑ったり、幼児にとって価値のある活動になっていなかったりする場合がある」(表11-⑤)と示されるように、講師は幼児との関わりを専門としていないため、伝わっていない部分については、担任教師が補完することが必要である。活動を進行する講師の主としての役割と、補助としての担任教師の役割を十分に認識して保育に当たる体制が求められる。一方で、講師と担任教師間で、幼児一人一人の特性について共通理解するような機会は持ちにくい。安心できる取り組みができるよう、特に配慮の必要な幼児については情報共有が求められるであろう。

そして、研究協力者が「イベント的な活動ではあるけど、活動を通しての子どもの育ちを捉えていけないといけない。それらの経験が日常生活の中で活かせるようにすることが大切である」(表11-⑥)と述べるように、担任教師には、これらの活動を通しての幼児の育ちを確かに捉えることが求められる。

表11 専門的な保育内容におけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①事前の打ち合わせにかかる時間が担任では取りにくく、園長や主任などフリーの教師が対応することが多い。講師のやりたいことと子どもの実態のすり合わせに、担任があまり入れない。園長などが全て把握して上手くいけばいいけど、担任の意図やクラスの実態と異なる場合があって、ぴったり上手いといったかと言われるとそうでない時もあったかもしれない。

- ②外部講師の思いが先行し、専門的な内容を幼児の実態に合わなくても伝授してしまうことがある。
- ③活動の目的を明確にし、講師と共有することが大事である。
- ④内容によって、幼児の反応も色々あり、苦手意識や不安感など幼児にとって逆効果になる危険性がある。幼児の実態や入りにくい幼児がどこまでできそうかなど伝えて、活動内容を決定する。
- ⑤講師の意図が伝わらず、幼児が戸惑ったり、幼児にとって価値のある活動になっていなかったりする場合がある。
- ⑥イベント的な活動ではあるけど、活動を通しての子どもの育ちを捉えていかないといけない。それらの経験が日常生活の中で活かせるようにすることが大切である。

8 預かり保育におけるチーム保育

まず、預かり保育の運営に関して、研究協力者は、明確な計画の必要性を指摘した。『幼稚園教育要領』においては、「家庭や地域での幼児の生活も考慮し、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動の計画を作成するようにすること」⁽⁸⁾とされているが、「計画が必要だが、ないかもしくは実態に合っていない場合もあり、指導にならず、単なる預かりや見守りである場合もある」(表12-①)と語られるように、現状はそういった園がほとんどであると考えられる。計画の立案に際し、内容については、健康と安全に留意し、心身の負担がなく過ごせるよう工夫することが必要である。そして、研究協力者は、「例えば、地域の施設を利用したり、午睡やおやつ、クッキングをしたりなど家庭や地域で体験するような教育活動を取り入れることが大切である」(表12-②)と、具体的な内容について提案した。教育課程に基づく活動を考慮した内容であることも踏まえ、家庭的な経験ができるよう検討されることが望ましいと言えるが、その際に計画は必要であろう。そのためには、園内の教師と預かり保育の担当者とが協働して計画の作成に臨むことが求められる。

次に、預かり保育の担当者は、園内の教師が当番制で関わる場合や預かり保育の専門の職員がいる場合など、園によって現状は異なる。研究協力者は、「担当者は、子どもにとっては園の担任をしていない人がいいと思う。園生活とは異なる落ち着いた家庭的な雰囲気でも過ごせるように、全く違う環境が子どもにとっていいと思う」(表12-③)とし、担当者が同じであると園生活の延長になり、緊張感が抜けない関わりになりがちな点を懸念した。理想としては、園で担任をしていない預かり保育の専門の担当者を配置することが望ましいであろう。

そこで浮上する問題が、担任教師と預かり保育の担当者間の連携についての問題である。通常保育と預かり保育で担当者が異なれば、限られた時間の中での情報共有は難しく、不十分になってしまうことも考えられる。そのことによって、幼児や保護者が戸惑う事態も生じかねない。生活の連続性を考慮すると、「教育課程に基づく活動を考慮した内容になっていない場合もある。朝、どんな活動をしているのか、預かりでこんな活動をしたんだということはお互いに知っておかないといけない」(表12-④)と述べられるように、それぞれの時間における活動内容や幼児の姿を互いに把握しておく必要がある。配慮を要する体験をした場合は、引き継ぎをして対応できるようにしておくことも欠かせないであろう。研究協力者は自身の経験から、「午前中にサポーターとして来てくれている先生が、そのまま預かりに入ってくれていた。午前中にどんなことをしていたか知っていてくれている人が1人でもいたら、連絡がある程度省略できる。そのような配置だと子どもの様子が伝わりやすい」(表12-⑤)と述べたが、そのような職員の配置であれば連携が取りやすい。また、研究協力者は、担当者との連絡方法の工夫について、「通常の保育が終わる少し前に来てもらって、1から10まで伝えなくても、本当にその日その子に必要な情報や保護者からの伝言を伝えていた」(表12-⑥)と述べた。口頭による情報交換だけでなく、連絡ノートなどを備え、幼児の教育課程に係る教育内容と、預かり保育における活動内容や様子を記録し、共通理解が図れるようにすることも有効であろう。

表12 預かり保育におけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①計画が必要だが、ないかもしくは実態に合っていない場合もあり、指導にならず、単なる預かりや見守りである場合もある。
- ②預かり保育は、午前中の教育活動と異なり、例えば、地域の施設を利用したり、午睡やおやつ、クッキングをしたりなど家庭や地域で体験するような教育活動を取り入れることが大切である。健康と安全に留意し、心身の負担

がなく、家庭的な雰囲気の中で過ごせるよう、無理のない活動を工夫することが大切である。

- ③担当者は、子どもにとっては園の担任をしていない人がいいと思う。園生活とは異なる落ち着いた家庭的な雰囲気で過ごせるように、全く違う環境が子どもにとっていいと思う。学童保育がそうであるように、先生の顔が違わないといけな。
- ④教育課程に基づく活動を考慮した内容になっていない場合もある。朝、どんな活動をしているのか、預かりでこんな活動をしたんだということはお互いを知っておかないといけな。
- ⑤午前中にサポーターとして来てくれている先生が、そのまま預かりに入ってくれていた。午前中にどんなことをしていたか知っていてくれている人が1人でもいたら、連絡がある程度省略できる。そのような配置だと子どもの様子が伝わりやすい。
- ⑥通常の保育が終わる少し前に来てもらって、1から10まで伝えなくても、本当にその日その子に必要な情報や保護者からの伝言を伝えていた。同じ屋根の下にいますので、何かあった時はお互い走ったりすることもあった。

9 幼児理解や指導計画等に関する話し合いにおけるチーム保育

チーム保育はもちろん、保育という営みは、教職員間の情報共有や共通理解を基盤として成立している。日々の保育実践において、このような話し合いの時間が毎日持たれることが望ましい。しかし、その重要性を強く認識していても、翌日の保育準備や環境整備等、限られた教職員でこなす業務は膨大であり、どこの園においても毎日十分な時間の確保ができないことが課題となっている。また、勤務形態の違いから、このような話し合いに参加できない教職員もいる。「園長、主任等を中心に、全教職員が話し合いの重要性を認識し、計画的に実施できるようにする」(表13-①)と共に、研究協力者の語りからは、そのような時間を短く有効に使えるように、短く話すように心掛ける、付箋紙で気になることを前もって出しておく等、何らかの方策の下で運用されていることが読み取れた。理解された内容については、その場にいなかった教職員にも情報が行き渡るよう、連絡ノートを活用する等の工夫もされている。

そこで共有される内容について、研究協力者は、「幼児の情報を伝えるだけになっていることもあり、次の指導の展開や遊びに結びついていかないこともある」(表13-②)点を問題視しており、このことから、幼児の様子を話すだけになり、環境構成や教師の援助についての具体的な話題が挙げにくい現状が示唆される。「話し合うだけではチーム保育と言わない。教師同士が関わって保育をすることを前提として話し合うことが大事である」(表13-③)という意識を持ち、話題に挙げた幼児や遊びのことを次に活かせるよう確認し合い、目指す方向へと指導をつないでいくことが重要である。また、研究協力者からは、「各担任が、気になることについて話題を出すだけではなく、全体を把握している管理職からも気になることを話題提供する」(表13-③)という有効な運用を述べた提案も挙げた。

その中で、特にこのチーム保育の運営に際し問題視されることは、「特定の教師が一方的に話をして、話し合いにならない」(表13-④)、「経験豊富な教師が主導権を握ったり、若手教師が消極的になったりして発言が偏る場合がある」(表13-⑤)ことである。これは、職場の人間関係や雰囲気に左右されるが、特にこのような場では顕著に表れるであろう。年齢、経験を問わず誰もが発言しやすい雰囲気が望ましい。「みんなが積極的に話し合いに参加できるよう、経験豊富な教師が中心となって、よい職員関係を構築したり会の雰囲気作りに努めたりすることが大事である」(表13-⑤)と言及されるように、発言しやすい環境作りについては、特に園長や主任を始め経験豊富な教師の資質や考えが大きく影響を及ぼすと言える。またそういった教師を中心に、園内の雰囲気がよりよいものとなるよう、全教職員が意識する必要もあるであろう。

表13 幼児理解や指導計画等に関する話し合いにおけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①園長、主任等を中心に、全教職員が話し合いの重要性を認識し、計画的に実施できるようにする。
- ②幼児の情報を伝えるだけになっていることもあり、次の指導の展開や遊びに結びついていかないこともある。
- ③話し合うだけではチーム保育と言わない。教師同士が関わって保育をすることを前提として話し合うことが大事である。各担任が、気になることについて話題を出すだけではなく、全体を把握している管理職からも気になることを話題提供する。

- ④特定の教師が一方的に話をして、話し合いにならない。
 ⑤経験豊富な教師が主導権を握ったり、若手教師が消極的になったりして発言が偏る場合がある。みんなが積極的に話し合いに参加できるよう、経験豊富な教師が中心となって、よい職員関係を構築したり会の雰囲気作りに努めたりすることが大事である。

10 ケース会議や園内研修におけるチーム保育

全教師が共通理解を図りながら研修等を進めていくことは、個々の保育実践力の向上につながり、園全体としての保育の質の向上にも寄与する。しかし、その必要性を認識していても、実際に時間を確保することが難しい現状が認められる。このような実態は、研究協力者の「日々忙し過ぎて、後回しになる。研究主任を中心に園内研修の年間計画を立てておかないと絶対にできないと思う」（表14-①）という語りにも表れている。通常保育期間は、保育に係る準備や環境整備や保育後の話し合い、指導計画の作成、事務作業、種々の記録、保護者対応等、園務は膨大にある。眼前の保育や行事に注意が向き、準備を優先することで、時間の確保やその機会自体を設けることが困難になることは、容易に推測できる。形式だけのものになる場合もあるであろう。研究協力者は、このようなチーム保育を確実に実施するために、「研究主任等を中心に年度始めに園内研修の年間計画を作成し、全職員に周知徹底し、実施できるよう調整する」（表14-②）ことを1つの方策として挙げた。計画的に実施できる体制作りが求められると言える。

また、研究協力者は、話し合いのスムーズな進行に際し、「事前に協議内容や事例を紙面にまとめ、配布し、各自が事前に検討、把握した上で会に臨めるようにする」（表14-③）、「学年毎や日程や時間帯の合う教師グループ等に分かれて話す時間を取ったり、事前にそのような協議時間を持って話を進めておいたりすることが、全体での時間を多く取れない時には有効である」（表14-④）と語った。事前の準備を念入りに行うことで、議論の時間の短縮を図ることができる。また、端的に分かりやすく内容を提示するため、テーマを明確にして話し合いをするよう意識したり、ポイントを押さえた資料を準備したりする必要がある。全員の意見や考えを出しやすい雰囲気作りと進行の仕方を工夫することが課題である。さらに研究協力者の議論からは、預かり保育や地域に開かれた幼稚園事業等の実施など、園の様々な実態により、全教師が一同に会する機会を設けることが困難なため、研修を共有することができにくい現状も示された。「参加できなかった人がいる場合は、記録で内容を伝え合って共通理解を図るようにしていた」（表14-④）と経験から語られるように、記録による共有はこのような場でも活用されている。

一方で内容については、「反省ばかりで、慰め合いになってしまうことがある。反省ばかりでなく、PDCAサイクルで、サイクルを次のPまでもっていくことが重要である。どの職員にも、やったことやできたことを認めて、意欲を持てるようにする」（表14-⑤）と語られるように、個々の保育技術の向上を目指す取り組みとして、有効に活用できる場となることが望ましいと言える。

表14 ケース会議や園内研修におけるチーム保育における特徴的な語り例

- ①日々忙し過ぎて、後回しになる。研究主任を中心に園内研修の年間計画を立てておかないと絶対にできないと思う。どういう研修をこの時期にしようとか、月に1回にしようとか、その日ができないなら日をずらしてすればいいと思う。
 ②研究主任等を中心に年度始めに園内研修の年間計画を作成し、全職員に周知徹底し、実施できるよう調整する。
 ③事前に協議内容や事例を紙面にまとめ、配布し、各自が事前に検討、把握した上で会に臨めるようにする。
 ④学年毎や日程や時間帯の合う教師グループ等に分かれて話す時間を取ったり、事前にそのような協議時間を持って話を進めておいたりすることが、全体での時間を多く取れない時には有効である。参加できなかった人がいる場合は、記録で内容を伝え合って共通理解を図るようにしていた。
 ⑤反省ばかりで、慰め合いになってしまうことがある。反省ばかりでなく、PDCAサイクルで、サイクルを次のPまでもっていくことが重要である。どの職員にも、やったことやできたことを認めて、意欲を持てるようにする。

IV 望ましいチーム保育の運営を支える要因

グループディスカッションにおいて、特に研究協力者の語りに頻出するキーワードは、「良好な人間関係」「情報共有や共通理解」「明確な役割分担」であった。これらの要件は、どのような形態のチーム保育の運営においても基盤となると考えられる。

1 良好な人間関係

一緒にチームを組む機会や時間が長ければ長いほど、教師間の関係性が重要になる。望ましいチーム保育の運営は、良好な人間関係の上に成立する。それらを構築するためには、円滑なコミュニケーションが必要になるであろう。教師が幼児にとっての人間関係のモデルとなるよう求められていることは確かである。対人援助職である教師にとって、対幼児、対保護者、対同僚など、どのような立場の人と関わる場合においても、高いコミュニケーション能力は欠かすことができない資質の1つである。その上で、教師自身が主体的に活動できるチーム保育の実現は、園内の支持的風土が基盤となる。研究協力者によれば、「みんなが発言しやすい雰囲気作りや、他の教師の多様な考え方を知り、分かり合い助け合えることができる信頼関係作りが大切」であり、自然にサポートし合える関係作りが重要である。その構築には、園長や実践者で主導的な立場の主任や研究主任等の確かなリーダーシップが欠かせない。この点について研究協力者が、「何でも話題に出せる雰囲気を作るのは、園長の力量なのかなと思う」と語るように、意見交換のしやすい雰囲気作りを左右する重要な役割を果たすのは、管理職である園長であろう。その点をどのようにマネジメントしていくかが、管理職の手腕に委ねられる。しかし、「9 幼児理解や指導計画等に関する話し合いにおけるチーム保育」の運営で述べたように、教師間に経験の差があると、経験豊富な教師の意向や意見が優先されやすくなる場合もあることには留意しなければならない。人間関係を含む教師のチーム編成には、十分な考慮が求められる。

2 情報共有や共通理解

「9 幼児理解や指導計画等に関する話し合いにおけるチーム保育」において述べたように、チーム保育を行う上で必要な共通理解は、一人一人の幼児に関すること、教育目標や指導計画に関すること、実際の保育実践に関することなど、多岐に渡る。日々の多忙な業務の中でも教師間のコミュニケーションを大切にしながら、保育時間外の話し合いの時間を確保することが重要であるだろう。他の教師の意見を受け入れ、話し合いを重ねることが、同じ方向性で保育を進めるという意識を持つことにつながると考えられる。時間の確保が課題とされる中で、その共有方法が重要である。やりとりのできる口頭での話し合いが望ましいが、研究協力者は、「人数が多ければ多いほど伝わりにくい。情報交換は、口頭でもいいしメモでもいい。付箋で貼っておくというのでもいい」と指摘した。勤務形態の異なる教職員も存在する中で、研究協力者は度々、「書くこと」による記録での情報共有について言及した。必要な情報をどれだけ共有し、同じ保育観をもって保育できるかが一貫した幼児への指導の実現につながり、高い教育効果を生むであろう。

また、研究協力者は、「共通理解しないといけない内容について、保育時間外でも間に合うことと、保育中でないと間に合わないことがある。今伝えておかないといけないと思うことは、その場で伝えないといけない」と保育時間外で共有される情報以外に、保育時間中の必要に応じた細かな情報交換の必要性も示唆した。

3 明確な役割分担

いくつかの形態の運営に際し前述したように、チーム保育には明確な役割分担が欠かせない。分担をするだけでなく、自分の役割はどのようなことなのかを十分理解した上でいつでも柔軟な対応ができるような心構えも必要である。役割が十分理解できていないと、主の教師に依存したり幼児への

不要な援助をしたり等の混乱を招く。「その場にいる以上、幼児にとっては主であっても補助であっても先生は先生」と指摘されるように、チームの一員であるという意識を持ち、責任感を持って役割を果たそうとする意識が不可欠である。また、一人一人の教師が、確かな保育観を基に、自分の役割を自覚して幼児を指導することが重要であるだろう。

V 総括

チーム保育を円滑に運営していく上で、チームを組む教師数は、重要な観点である。教師数が多いほど柔軟なチーム編成が可能になり、保育内容に応じて教師が得意とする分野を発揮する機会も増えることから、高い教育効果を期待できるであろう。一方で、教師数が多いと、保育に必要な共通理解に支障を来すこともある点を考慮する必要がある。教師数が増えるほど、連携が難しくなることを考慮すると、全体の状況を把握しながら統率するチームリーダーは必要であり、その下でチーム保育を運営することが望ましい。同時に、対象となる幼児数が多くなれば、扱う情報量が増え、一人一人に対する幼児理解や共通理解が難しい。これらをどのように園内で解決していくかが、大きな課題であると言える。一方で、研究協力者が指摘する「教師も幼児も人数が少なければ少ないほど、関係が固定化しがちになる」という傾向は、配慮が必要な点であると言える。

社会や子育て環境の変化に伴い、幼稚園教育に求められる社会の要請は多様であり、様々な課題に直面する際の教師の力量は、大きく幼児の成長発達に関与する。向山（2008）は、「これからの時代が要請する幼児教育・保育の方法、内容は、一教育者・一保育者の力量では抱え切れないほど多様で能力も要求される。園に関わるすべての大人たちのネットワークが大切になってくる。これからは、1人の担任だけが教育する時代ではない。「チーム」で子どもを育てる体制づくりと、そのための報告・連絡・相談が重要になってくる」⁽⁹⁾と指摘している。よりよい幼児の園生活を保障する上で、教師が協働し、互いの不十分な点を補完し合いながら、多くの視点で幼児を捉え、保育していくことは現代の幼児教育にとって喫緊の課題であると考えられる。

2017（平成29）年に改訂された『幼稚園教育要領』では、「地域や幼稚園の実態等により、幼稚園間に加え、保育所、幼保連携型認定こども園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などとの間の連携や交流を図るものとする」⁽¹⁰⁾とされた。様々な機関との交流に当たり、他園の教師や保育士、小学校教師等との連携の強化が求められるであろう。また近年、子育てパートナーとしての保護者との連携や地域連携も重要性を増している。さらに、障害のある幼児への対応については、関係機関との連携等、園外での連携についても目を向ける必要がある。このように、チームで幼児の育ちを支えるという意識は、園の外にも広がりを見せていると言える。

教師の増員なしでも、状況や保育場面に応じて、チーム保育を柔軟に取り入れることは可能である。教育効果を十分に吟味した上で、陥りやすい問題点を意識しながら、適宜導入を検討していく必要があると言える。それぞれの園の実態や特色を踏まえて、有効なチーム保育を計画的に実施し、反省や改善を図っていくこと、保育の質の向上を図っていくことが重要であると考えられる。

引用文献

- (1) 松村和子「チーム保育を考える—保育のパラダイム変換を促す保育法—」文京学院大学研究紀要3（1），2001，pp.13-26.
- (2) 岸千夏「チーム保育における教師間の役割構造—補助的教師の「働き」を規定するもの—」聖心女子大学大学院論集33（1），2011，pp.74-52.
- (3) 入江礼子・内藤知美・太田佐恵子・井上紀子・杉崎友紀・黒川愛・上田陽子・塩原紀子「異年齢交流を支えるチーム保育の検討：指導計画の変容を手がかりとして」鎌倉女子大学紀要（10），2003，p.7.
- (4) 馬場訓子・井山房子・古埜弘子・白神繁子・平松由美子・守屋操・片山美香「幼稚園教育にお

- けるチーム保育の多様な形態と教育効果」岡山大学教師教育開発センター紀要（8），2018，pp.83-96.
- (5) 前掲書（4），pp.83-96.
- (6) 小田豊「幼児が育ち合う工夫の場としての「チーム保育」」，初等教育資料（758），2002，pp.88-89.
- (7) 前掲書（1），p. 20.
- (8) 文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館，2017，p.22.
- (9) 向山陽子「仲間と学びあう」（岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行/監修,榎沢良彦・上垣内伸子/編:『保育者論—共生へのまなざし—』）,同文書院,2008，pp.76-77.
- (10) 前掲書（8），p.13.

